



帰国前研修会

(財)自治体国際化協会業務部

帰国前研修会は、JETプログラムの二～五年の勤務を満了し、帰国予定のJET参加者のうち希望者を対象にした研修会で、帰国後の生活・就職に関する情報や心構えなどを元JET参加者やさまざまなビジネス分野から招いた講師から提供することにより、JET参加者の今後の生活をより充実したものとすることを目的に開催しています。

二〇〇七年度は三月二日(月)～五日(水)まで横浜市のパシフィコ横浜において開催し、アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド出身者を中心に二七カ国、五五〇人の参加者がありました。

初日の午後二時からの開会式では、当協会・総務省および外務省から、JETプログラムにおいて地域の国際化や語学指導に多大な貢献を果たしたJET参加者に対し感謝の言葉が寄せられるとともに、残された任期を十分に生かしてほしいとの言葉が

ありました。また、帰国後、JET参加者に日本のよさを宣伝してもらい、日本を訪れる旅行者を増やすことを通じて日本と祖



↑インフォメーション・フェア会場

国の懸け橋になつてもらいたいという趣旨から、「ようこそジャパン」キャンペーンの内容について国土交通省の担当者から説明を行いました。

引き続き在日英国商工会議所のエグゼクティブ・ディレクター、イアン・デ・ステインズOBE氏による基調講演が行われ、キャリアに関する考え方が昔と比べてどのように変わってきたか、そして現代の競争の激しい環境下での職探しのために必要なスキルやJET経験の生かし方について語るとともに、自身の多彩な経歴に基づく体験を披露し参加者達の意識を盛り上げていました。JET参加者にとって今後のキャリアを考える上で、大変刺激になったと思われます。

続いて、当協会のプログラム・コーディネーターであるデイビッド・ゴツツイルとステイブ・ウォーナーが残りの任期までの時間をいかに充実させるかについて話をした後、麗澤大学のアダム・コミサロフ氏に帰国準備

と逆カルチャーショックについて講演いただきました。帰国後の適応は現時点では想定できないことですが、誰しもが経験する可能性があると、注意喚起するとともに、対処方法については有益な情報となると思われます。

最後に、北米地域とイギリス・オーストラリア・ニュージーランド地域の二会場に分



↑マーケティングについての分科会

かれて、就職活動時に必要な実用的な履歴書の書き方と面接テクニックについて分科会が行われました。JETプログラムで得た経験を今後のキャリアに生かすためには、どのようにアピールすればよいか事例を挙げての説明がありました。JET参加者にとっては、この分科会は、JETプログラムと今後の自らのキャリアとのつながりを確認する場ともなったようです。

二日目には、申込時に寄せられた参加者の関心事項に基づき、さまざまなビジネス分野で活躍している講師を招いて、各業界の近況やその職業に就くために必要なスキルなどについての分科会が行われました。各時間帯に四コマずつ、計二〇コマの分科会のうち、各自の興味・関心に応じて分科会を選んで参加しました。今年度は大学院進学、海外支援、ジャーナリズム、TEFL/TESL、マーケティング・PR、広報についての分科会の人気が高く、主として外資系企業などの代表・役員クラスの方々である講師たちが、それぞれの体験に基づく有益な情報を提供しました。進路に

ついてまだ漠然としたイメージしか持っていなかった参加者も、専門分野の具体的な情報を聞くことによって、イメージをより明確にすることができた様子でした。

ビジネス分野別の分科会に続いて、各国在日大使館から外交官を招いて国別のプレゼンテーションが行われ、現在の母国状況や税金関連情報および公務員への応募方法等の実務的な説明が行われました。

また、二日目はこれらの分科会と平行して別会場においてインフォメーション・フェアを開催し、キャリア・アップのための教育機関などの資料やJET A支部の情報を提供する場を設けました。同時にJETプログラムの参加者有志によって構成された自主的な親睦団体であるAJETが主体となつてインフォメーションブースを設け、民間企業や大学などの教育機関の情報提供を行いました。

さらには、例年参加者から好評を得ているキャリア・個別カウンセリングの講師を二人増員し計六人の講師の協力を得て二日目に実施しました。前日に履歴書の書き方と面接の分科会にて講演していただいたヴィンス・リッチ氏のほか、テンプル大学のシャノン・クイン氏、アメリカンエクスプレス・インターナショナルのイェジ・ジョン・シプリー氏、ユリカのアン・グッド氏、カナダから招いたフロンティア・カレッジ(NPO法人)のエイミー・シンドラー氏、そして、ウオールストリートアソシエイツのジェイソン・



↑就職活動に関する分科会の様子

ピケンズ氏の協力で、講演では触れられなかった事柄や、それぞれのJET参加者が特に興味のあることなどについて参加者の個別相談に応じました。個別のカウンセリングは、参加者からの評判がよく、大変好

評だったと言えます。

三日目には、国別での元JET参加者によるパネルディスカッションとビジネスパネルディスカッションが行われました。

元JET参加者によるパネルディスカッションでは、海外から招いた講師が進行役となつて、母国の最新就職事情やJETプログラムでの経験を生かした就職活動および逆カルチャーショックなどの体験について話していただきました。各講師ともに母国においてJET参加者の同窓会組織であるJETAAの役員として活躍しており、帰国後のJETAAからの支援についての情報も併せて提供することができ大変有意義でした。それぞれの経験について話した後、質疑応答の時間が設けられました。帰国後の生活や就職など、現役のJET参加者が不安に思っていることについての確かなアドバイスを得られ、活発な質疑応

答が行われました。

国別のビジネスパネルディスカッションでも、さまざまなビジネス分野からの講師が、自らのキャリアや業界についての話を行った後、質疑応答が行われました。それぞれの業界の専門的見地から、講師からは参加者に対する確かなアドバイスが行われていました。

また、帰国前研修会に参加した一七カ国すべての参加者にとって情報提供を行うべく、今年度は「そのほかの国」のパネルディスカッションを設け、インド、南アフリカ、ジャマイカ、ベルギー、フランス出身のパネリストによる質疑応答の機会を設けました。

帰国前研修会とはほかの研修会とは性格を異にし、希望者のみが参加する任意のものであるため旅費・宿泊費ともに自己負担です。そのため参加者はみな強い興味・関心を持ち、研修会への期待も高く持つて参加します。われわれ主催者としても、その期待に答えるべく今後も参加者の要望や今回の反省点などを踏まえ、よりよい研修会にしたいと考えています。この研修会に参加することによって、JET参加者がプログラム終了後に対する不安を少しでも解消し、日本での生活を最後まで充実して過ごすことを願ってやみません。

また帰国後も、JET参加者が日本での経験を生かしてさまざまな分野で活躍されることを、そして長きにわたって日本と諸外国との懸け橋となつていただけることを併せて祈念しております。

私の第2の故郷



長崎県国際交流協会国際交流員
Edja Bosque-Hamilton
エジャ ボスク・ハミルトン

JETプログラム・国際交流員として長崎に赴任した時、以前七年間ほど国費留学生として日本に住んでいたため、ガーナの生活環境の違いはよく理解していました。しかし、職場環境に関してはまだまだ分からないことが多く、内心不安に思っていました。というのわたしの国は、常夏特有の時間がゆつたりとした環境です。これまでの生活環境から、正確さとスピードが求められる日本にうまくなじめるのかとても心配でした。

一四年前、石川県の金沢大学大学院留学中に、友人のALTとCIRから初めてJETプログラムのことを聞きました。その時地元石川県の国際交流団体からの依頼に応じて、ホームステイ、保育園や小・中・高校の学校訪問、英語林間学校などを行いました。後年まさか、また国際交流推進のお手伝いをさせていただけるとは思いませんでした。

長崎に来て二年半、大変すばらしい経験をすることができました。妻と娘も地元で元気に溶け込み、長



↑宮崎県からの修学旅行生と「ガーナのカカオ貿易ゲームと説明」

崎での生活を楽しく過ごしています。北陸地方と異なり、ここ長崎は温暖な気候で雪もなく、冬は過ごしやすいところです。一年を通して天候もよく、四季のない常夏から来たわたしにとっては、雪がめつたに降らないことはとても幸運なことです。長崎の人は、穏やかで気さくな方が多く、とてもなじみやすかったです。母国ガーナ人にとっても似ていると思いました。観光で来た方々や外国人の方を手厚くもてなし、受け入れてくれる土地柄ということもあり、家族そろってたくさんの友達を作ることができました。

職場をはじめ、卓球クラブや娘の幼稚園のパパの会のメンバー、小学校、近所の方、病院、大学、地元の市場の店員さん。挙げればきりがありません。友人は、郷土料理をごちそうしてくれたり、伝統のある祭りによく誘ってくれました。これらすべてが、私たちの宝物となりました。

ガーナから来たと言うと、「ああ、ガーナチョコレート!!」と多くの人に言われました。ある時はサッカーについて話をしたり、またある時は「夏の長崎とガーナの暑さと湿度は同じですか?」と聞かれたり、さまざまでした。長崎の夏の天候はガーナの天候と似ていて、夏が来るたびにガーナを思い出しました。

現在、JETの任期も残すところ四カ月となりました。当初心配していたことは問題なく、職場の皆さんと楽しく仕事をさせ

ていただきました。皆さんとても協力的で、さまざまな面から私に対しサポートしてくれます。その中で学んだことは、互いに尊重し合い、相互理解に基づいた関係を作ることがとても大事だということです。たくさんの人々とかかわる中で、長崎のよいところを発見し、気付くところ長崎が私を含め家族の第二の故郷となりました。

JETプログラムでは契約団体によって仕事が変わるとよく言われますが、国際交流協会でのわたしの仕事は、県内外国人向けの情報提供、英語月刊誌の編集発行、ウェブサイトの更新、通訳と翻訳、イベント企画、ガーナの出前講座と講演、学校訪問、英語教室と多様です。

雑誌の作成の締め切りに間に合わせるのは大変ですが、学校訪問や出前講座などでたくさんの方に出会えることがとても楽しく、やりがいがあります。

JETプログラムに参加する前のわたしは、人前でスピーチをすることが苦手でした。しかし、この仕事は日本語で老若男女問わず、大勢の人の前で発表しなければなりません。私が人前で話をするということは、苦手を克服する方法の一つと言っても過言ではありません。それくらいとても抵抗がありましたし、緊張しました。現在は少し克服でき、以前に比べて緊張しなくなってきました。

今でも忘れられないのは、初めて人前で発表した時の受講生の方が興味を持って聞

いてくれた姿です。例えば、「ガーナではアカン族は生まれた曜日により決まった名前がある。よさこい祭りがある。多くの人は英語、二部族語以上を話せる」などです。

文化の類似点と相違点は活発な話し合いの中からさまざまな議論が生まれます。そしてお互いの関係を深め、理解し合えるようになります。国際交流の推進は、この小さな理解の重なりから大きな理解へとつながっていくのだと思います。

学校訪問は如実に成果が感じられます。あいにく多くの日本人は、ガーナについてとなるとチョコレートやサッカーのことしか分かりません。ガーナの生活や文化についてできるだけ多くのことを人に知ってもらいたいと心から思いました。

重要なことは、アフリカに関する多くの思い違いを正しく伝えることです。受講生の中に旅行経験の豊かな人がいて、その方が現在と古代アフリカの事情をとても深く知っている時は、逆に驚かされます。

わたし自身どこへ行ってもガーナの代表



↑ガーナの太鼓とダンス体験：小学生と一緒に

とされている気がします。実際、多くの人が私を見て、初めて会ったガーナ人だと言います。このことはガーナ人として非常に重い責任を感じますが、反面、自国ガーナの代表として立つことを誇りに思っています。

いずれ故郷ガーナへ帰ったら、日本で過ごしたことや経験などを逆国際交流として語りたいと思います。今回貴重な経験をさせていただいたことに心から感謝しています。身近なところから、私にしかできない小さな交流の積み重ねをさらに続けて、より大勢の人にガーナのことを伝えて行きたいと思っています。



Edja Bosque-Hamilton

ガーナ・セントラル州ドンクワ出身。ガーナ工科大学で化学工学を専攻し、卒業後主に環境問題、地方開発、水に関するさまざまな研究に携わる。1993年から金沢大学大学院に留学し環境工学を専攻、2005年8月、再び日本に戻り、(財)長崎県国際交流協会に勤務。趣味は相撲観賞、卓球、音楽鑑賞・演奏。JET終了後は帰国する予定で、本業である仕事はもとより、日本に関する活動も積極的に取り組みたい。

わたしの 日本のお母さん



兵庫県豊岡市立日高東中学校外国語指導助手
Luke Wevers ルーク・ウェバース

日本に来たころ、わたしはほとんど日本語を知らないどころか、日本について知っていることと言えばテレビの中で見た物がすべてでした。正直なところ、日本はわたしにとって一年も住むような所ではないと思っていたままです。ほかの多くのJET仲間たちが興味を示していたように、一〇代のころのわたしは日本の漫画やアニメ、日本語自体にも興味はありませんでした。

何の変哲もないニュージーランドで育ち、わたしは南太平洋にある小さな島で過ごし続けることに息苦しささえ感じていました。わたしの友人の多くは、オーストラリアに引っ越して行きました。しかし、わたしはそこに住むことに少しも興味がわきませんでした。わたしには新しい人々と新たな人生を始める場所が必要でした。

わたしが卒業まで一年も残っていなかったある日、授業に出席するため歩いていたら、雨が降り出してきました。雨を避ける目的と、わたしの関心のあったJETプログラムについての情報を探す目的のため、わたしは就職課の事務室に入りました。デスクの後ろにいた女性が、わたしがそこに一度も訪問したことのない人間であることにすぐに気付く、必要事項を書くフォームをすぐに手渡してくれました。住所を書いている時に、彼女はわたしにJETプログラムなら日本への渡航費用については心配はいらないと教えてくれたので、「いいに署名すればよいのですか」と尋ね返しました。

わたしはJETプログラムの面接試験につ

いてははっきり覚えていません。なぜならわたしの友人の葬儀と通夜のことと頭がいっぱいだったからです。JETプログラムへの参加が決まってから約一〇カ月後、わたしは来日しました。その時、わたしはベストを尽くせるよう頑張りたいと思いました。

来日した時、わたしが入ることになっていたアパートはまだ清掃中で、新しい畳を敷く作業をしていました。そのため、最初の二日間には小さなビジネスホテルで過ごしました。初日はほとんど眠れませんでした。わたしが居た部屋にはエアコンもなく、窓のそばに腰をかけ涼しい夜風に当たりながら、自分の人生で最大の失敗を犯したのではないかと思い始めていました。

最初の数日間、何回日本を離れようと考えたことが。しかし、それを誰にも伝えたくはありません。今振り返ると本当に帰ろうと思っていたいました。最初は本当にイライラしていましたが、何よりもすごく寂しい思いをしました。わたしの周りにあったものすべてが全く未知なものでした。細い通りに混み合ったビル、同世代の人に会えなかったこと、訳の分からない言葉、そして、かつてこのように家から遠く離れたことのない事実すべてがわたしにそう思わせました。

今住んでいる場所に着いたころは、カルチャーショックを受けました。わたしはほとんど誰にも話しかけることができず、アパートでは誰もがわたしのことをまるで外部の人間を見ているような目で見てきました。暑さがわたしの体力を奪い、スーパーマーケットに

行けば迷子のようになり、できるだけ親近感のわくものを探しました。寿司は以前にも食べたことはありましたが、アサヒビールも飲んだことはあったのですが、最初の何カ月かのわたしの言語能力で買い物をするのは、まるでくじ引きをしているようなものでした。あんこ入りのドーナツが好みではないこと、とんかつが大好きなこと、生まれ故郷を感じることが出来る食べ物にはいくらでもつき込んでしまつことはすぐに分かりました。そしてほとんどの時間を外国人と過ごす「外国人バブル」の中に居ることに気が付きました。

ある日、わたしがほかのJET仲間と自分の部屋の前で話していた時、離婚していてわたしと同年齢くらいの子を持つ五〇歳ほどの近所の女性が、わたしに話しかけてきました。その時からわたしに変化が訪れました。彼女は、彼女の手料理と交換に週に一回英語で会話をしないかとわたしにおぼつかない英語で尋ねてきました。

彼女との関係はわたしの日本の生活でとてもかけがえのないものとなりました。彼女はわたしの日本におけるお母さんの存在になりました。いつも彼女の家族としてころよく迎え入れてくれ、わたしが全く知らない日本のことをいろいろ教えてくれました。

ある時彼女はわたしを、隣まちで鍛冶屋をしているという友達の弟に会わせてくれました。日本語でのすばらしい講義をしてくれた後で、彼はそぎ終え、取っ手をつける前の刀を見せてくれました。わたしはその刀を持ちながら、手のひらの中に歴史のひとつかけらが

あることを感じました。

一年ほど前に近隣都市にある医者が、わたしの日本のお母さんには子宮筋腫があると診断しました。その知らせはわたしにとつても大きなことでした。日本に来る直前に大事な友人を失い、またここでも同じことがあるのだと思いました。ここでは毎週のように彼女の家に招待してくれ、彼女の親友の父親の葬式にも連れて行ってくれて、小声ですべてを説明してくれ、わたしを本当の子どものように接してくれた偉大な女性が、病氣によって氣力を失われていました。

五力月間のうち、四力月彼女は入院生活を送りました。両方の卵巣を取り除くため二回の手術を行い、数え切れないほどの化学療法と放射線療法を受けました。それらすべてを終わらせたころ、医者はすべての筋腫が取り除けたこと、そして転移もしていないことを伝えました。その知らせを聞いた時は安心以外ほかに言い表しようがありませんでした。彼女はまだ化学療法を受け、その痛みと弱りに耐えなければなりません、髪の毛は伸びて、筋腫はもう取り除かれました。

わたしの日本での生活はすばらしいことといっぱいになりました。玄関の前に雪がたくさん積もること、小さなまちのわたしの家に止まっている車が見えなくなるほど雪が降り積もることを、わたしはこれまで経験したことがありませんでした。そして、すてきな友人を作ることができたことは、わたしが初日に感じたあの寂しさを打ち消しました。

わたしは新しいものを求め、新しい国で、

新しいことを始められるように、日本に向けて旅立ちました。何年もかけて貯金をするのとなく、旅行をするという願望を叶えたいと思っていました。そして、わたしはそこで自分が捜していた物を見つけました。ニュージーランドにいる家族と同じくらい愛し、受け入れてくれた新しい家族に出会えました。わたしにとつて「日本の現実」を見ることは時間がかりましたが、わたしは、日本の母がしてくれたこと、彼女が見せてくれたわたしの人生のセカンドホーム、そして日本の母を忘れることはないでしょう。



Luke Wevers

ニュージーランド・ウェリントン出身。幼少のころからウェリントンに住む両親の離婚のため引越しを繰り返す。高校卒業後、同市にあるティーチャーズ・トレーニング大学へ入学するが、2年後ビクトリア大学の演劇学部へ編入。いろいろな場所や文化に触れたいという想いが強まりJETプログラムに参加した。今後何をしたいかは確かではないが、新しいものに触れたい気持ちには変わらない。



↑わたしのお母さんと一緒に

Home Away From Home

Being the first CIR and only person from Ghana to come on the JET Programme, I was on edge when I first arrived in Nagasaki. I wondered whether I could cope with the stress of working and living in Japan. I had lived in Japan several years ago as a foreign student, so I had heard about the demanding working conditions in Japanese offices. Hailing from a country with a laid-back culture, I have had to adjust to Japan time (punctuality) and other demanding social conventions and etiquettes. Now moving into the final four months of my JET contract, I have found working in Nagasaki, on the contrary, to be relatively stress-free and living here is rather like a home away from home.

I first learned about the JET Programme from friends who were ALTs and CIRs 14 years ago when I was a foreign student at Kanazawa University in Ishikawa Prefecture. At the time, I was invited by local international exchange organizations to do home stays, visit daycare centers, speak at elementary, junior high, and high schools, and attend English summer camps. Little did I know that I would be doing this again and much more promoting internationalization later in life.

Living in Nagasaki for the past two and a half years has been a wonderful experience. My family has settled in well and now calls Nagasaki home. Unlike Hokuriku in northern Japan, the weather is mild, warm and bearable during winter. Moving from

a tropical country where seasons never fluctuate to a temperate climate that experiences four seasons, I am indeed fortunate that it rarely snows in Nagasaki during winter. Nagasakians are laid-back like Ghanaians, easy to get along with, hospitable, generous and accepting of foreigners. I have made many friends whom I have come to cherish. I have made friends at diverse places: my table tennis club, my daughter's kindergarten and elementary schools, tangerine harvesting meets, festivals, hospital, university and the local market. Some acquaintances have made me feel at home by inviting me to savour popular local dishes, and taking me to festivals. On hearing that I am from Ghana, many people tend to say "ah Ghana chocolate" or talk about soccer, while others ask whether Ghana is as hot and humid as Nagasaki during summer. Ghana's weather has a lot in common with Nagasaki during summer: this makes me feel that I am home away from home.

Like the mantra of the JET Programme 'Every Situation Is Different', my work as a CIR is varied: demanding when I have deadlines to meet, but exciting when I meet young children at school and adults at speaking engagements. I edit the Association's monthly English magazine for foreigners living in the prefecture, update the website, interpret and translate on occasion, plan events, give lectures about Ghana and culture, visit schools, and teach English. My coworkers are cooperative and they give me all the assistance I need with the intricacies of office

My Japanese Mum

When I arrived in Japan I knew less than a handful of Japanese words, and all I knew about the culture was what I had learned from watching TV. To be honest, Japan for me had never been a place that I had yearned to live before. As a teenager I had never had a fascination with Manga, Anime, or the Japanese language as many people on the JET Programme did - and still do not.

I had grown weary of New Zealand, and felt almost suffocated by the isolation of living on an island in the south of the Pacific. Many of my friends had either moved, or were saving to move to Australia. But I had no interest in living there. I wanted a place to start over; a place where I could start new, with new friends, where all people knew about me was what I told them.

It was during a walk to class when it began to rain on a day less than a year before I graduated and in order to shelter from the rain and satisfy my curiosity about the JET Programme, I ran into the graduate job search office. The girl behind the desk instantly recognised me as someone who had never been there before, and asked me to fill out the necessary forms. While writing my address she informed me that it would include free travel to Japan and I asked, "Where do I sign?"

I do not recall much about the interview except that it was sandwiched between my friend's funeral and his wake. I passed and arrived in Tokyo nearly 10 months later, and had to give it my

best shot.

I had to spend my first two nights in a tiny business hotel near the train station, because my new apartment was still being cleaned and new tatami mats were being laid. I hardly slept at all on my first night. There was no air conditioning in my room so I sat by the window, in the cool night air, trying to decide if I had just made the biggest mistake of my life. I have never told anyone how close I really came to leaving Japan in those first few days. Looking back now I think that had I known how to, I probably would have left. I felt so incredibly frustrated, but more than anything, I really felt alone. Everything that was around me felt so amazingly alien to me. The tiny streets, the crowded buildings, the complete lack of anyone the same age as me, the bewildering language, and the fact that I had never been so far away from home.

I was hit with culture shock when I first got to my town. I could not speak to anyone, my apartment felt like a stranger's spare room, everyone stared at me, the heat completely drained all the energy from me, and most of the time I felt like a lost child in the supermarket, searching for something familiar. I had eaten sushi before, and had a few Asahi beers before, but my inability to read any Japanese for the first few months made buying food at the supermarket a complete lottery. I quickly learned that I did not like doughnuts filled with anko, I loved tonkatsu, and that if I wanted anything that tasted food from home then I had to pay more. I found myself living in a "gaijin bubble," where I was

Edja Bosque-Hamilton

bureaucracy and routine, greatly helping me settle in during my first year. I have quickly learned that to foster good office relations, it is helpful to build a respectful understanding with those you work closest with.

My work gives me the opportunity to meet and interact with a variety of people. One of my weaknesses before coming on the JET Programme was speaking in public. However through this programme, I am obliged to speak to audiences, both young and old, albeit, in Japanese. Giving presentations has been a quick and convenient way to overcome my fear of speaking in public. I still remember the first time I stood in front of an audience and saw their reactions when I told them that in Ghana the Akans have a predetermined given name based on the day of birth, we also celebrate Yosakoi festival, and many people speak two or more local languages, excluding English. Cultural differences and similarities generate living discussions and promote mutual understanding.

I always look forward to doing school visits as they allow me to talk about my country, its people, culture and uniqueness. Unfortunately, many Japanese people associate Ghana with only chocolate and soccer so I do my best to inform them about other aspects of Ghanaian life and culture. I have realized that I am a representative for Ghana anywhere I go, as many people have told me I am the first person from Ghana that they have met.

Undoubtedly, the impression I make is going to have a permanent effect on their image of my country. This situation necessitates that I carry out my duties with a sense of responsibility, but also I feel proud to be an ambassador for my country.

I have found speaking engagements to be opportunities to educate people about misconceptions about Africa in general. Many people I have spoken to are fairly uninformed but tend to be receptive to my presentations. I have also met a couple of well-traveled people who have amazed me with their in-depth knowledge of the situation on the African continent. I intend to return the favour when I go back to Ghana, and talk about my time in Japan.

The JET Programme can be fun, challenging and rewarding for participants who come with an open mind and no preconceived ideas about Japan, but come ready to learn and adapt to the challenges of living in a different culture. The programme offers opportunities for locals and foreigners to learn about each other, like a two-way street. People in my office and around me have been wonderful and have been of great help. I hope to take the lessons learned with me when I return. Meanwhile, I can proudly say that my stay in Japan has truly been home away from home.

英語

Luke Wevers

spending all of my social time with other foreigners.

The change came when one of my neighbours - a 50-something divorcee with two children of my age - approached me while I was in front of my apartment talking to another JET from my town. She asked me in broken English if I would want to talk to her in English once a week, in exchange for a home cooked meal. Without hesitation, I said yes. The relationship I built with her became one of the most important things to me during my stay. She became my "Japanese mum." She welcomed me into her family and introduced me to a side of Japan that I would never have known existed.

She once took me to meet her friend's brother, who is a sword smith in the next town over. After an exhaustive lecture in Japanese he showed me a sword that he had just finished, and that he was about to send to have the handle attached. Holding this sword, I felt like I was holding a piece of history in my hands.

About a year ago doctors in a neighbouring city diagnosed my Japanese mum with ovarian cancer. The news felt like a huge weight pressing down on me - I had had to say goodbye to a good friend just before I came to Japan, and here it was, about to happen all over again. Here was this amazingly lady, who had taken me into her home every week, to her best friend's father's funeral and quietly whispered, explaining everything to me, treated me as if I were one of her children. And there she was, flattened by this illness.

Over a period of 5 months she spent about 4 months in hospital. She had two operations to remove both ovaries, and had countless chemotherapy and radiotherapy sessions. It was only after all of this that the doctors were convinced that they had removed all of the cancer and that it had not metastasised. There are no words that could do justice to the relief I felt when I heard this news. She still has to have chemotherapy, and because of this she suffers from constant weakness and pain, but her hair will grow back, and the cancer is gone.

My time in Japan has been full of extremes. I have never lived with snow outside of my front door, and in my small town there was so much snow one year that I could not see my car, which was parked outside of my front door. I have felt the full gambit of emotions, from the loneliness of the first night, to the happiness I get from making great new friends.

I left for Japan, looking for something new; I wanted to make a new start in a new country. I wanted to be able to travel without having to save money for many years. And I found what I was looking for. I found a new family, equally as loving and accepting as my family in New Zealand. It took a chance meeting for me to find the "real" Japan, but I will remember my Japanese mum, and everything she showed me about Japan - my second home - for the rest of my life.

英語